

|||||||
書 評
|||||||

「ニューヒストリー 日本の近代3 磐梯山噴火 ー災異から災害の科学へー」

北 原 糸 子 著

吉川弘文館 (1998) 270頁

今年2000年に入り、3月に有珠山、7月に三宅島が噴火し、それぞれの地域に大きな被害をもたらしている。造山帯に位置し、火山がいたるところに分布する日本列島は、古くから火山災害の常襲地帯であった。

著書の題名にある磐梯山噴火は、1888年(明治21年)7月15日に発生した。その噴火は、大規模な水蒸気爆発による山体崩壊、疾風、岩屑なだれを伴い、死者518名を出した大災害であった。山体崩壊による土砂の流出は、いくつもの集落を埋積し、破壊した。裏磐梯の代表的な檜原湖や五色沼などの自然景観は、この噴火により創出されたまだ歴史の浅いものなのである。

著者の北原糸子氏は、「災害の社会史」を提唱し、本書の他にこれまで、『安政大地震と民衆』三一書房、1983年、『都市と貧困の社会史』吉川弘文館、1995年などの著作がある。

本書は、磐梯山噴火を事例として、災害が発生してからの報道・救済・復興などのプロセス、また江戸時代から明治時代にかけての災害観の変化を社会史の視点から明らかにしたものである。著者が指摘するように、1995年に発生した阪神大震災により、災害研究において「自然災害の理学的研究だけではなく、被災者の生活回復過程を視野にいたした学問分野が必要」ということが社会的に認知される

ようになった。本書はそのことを念頭におき、過去の災害を題材として「人々が、社会が災害に対してどう反応したのか」ということについて検討を進めている。

章構成は、以下の通りである。

- I 災害と社会
- II 新聞は災害をどう伝えたか
- III 義捐金問題ー新しい社会空間の登場ー
- IV 災害救助法ー近世から近代へー
- V 磐梯山噴火の被害と救済
- VI 災害リアリティーへの接近
- VII 災害を視る眼

おわりに

主要参考文献一覧

文献案内

第I章の前半部では、災害観に変化をもたらす要因となった「地文学」(自然地理学)の歴史、本書の概要、目的について述べている。後半部では、磐梯山噴火に関する研究の概要について解説し、黎明期の災害科学のあり方について言及している。

第II章は、当時の新聞が磐梯山噴火をどのように報道したか考察する。そこでは、噴火記事の増減や記事の内容についても検討が加えられる。災害発生段階から救援開始期段階までの記事の内容変化、新聞社ごとの対応の違い、災害情報の入手の仕方など、新聞が扱った噴火について詳細に分析されている。

第Ⅲ章は、義捐金に視点をあて、その起源や定着過程、救済金の配分、義捐者層について、他の災害を事例に挙げながら明らかにした。北海道南西沖地震、阪神大震災においても多額の義捐金が集められたが、その義捐金の起源は、1885年（明治18年）大阪大洪水に遡るといふ。本章の副題である「新しい社会空間」とは、義捐金を通して生まれた「互いに顔を見知り会う関係でない人びとが志を共有するといふだけで一体感を共有できる新しい空間」を意味している。

第Ⅳ章では、近世と近代における災害救済の違いを説明したのち、災害救助体制の整備の過程について論じている。その違いのひとつは、近世の場合、領国ごとに救済がなされたのに対し、近代は国民に対する統一的な基準が設定されたことであり、もうひとつは、インフラに対する復旧への恒常的準備の有無である。また、本章では、1880年（明治13年）に発布された救済制度「備荒儲蓄金^{びこうちうくきん}」について詳述する。「備荒儲蓄金」とは、「県が国の補助を受けて、地租の3%を拠出し、災害基金として準備しておくといふもの」である。

第Ⅴ章は、噴火の被害について各村落ごとに言及し、さらに救済の実態と村や「家」の復興の過程を明らかにしている。

第Ⅵ章は、災害を被災地域外へどのようなメディアを通して伝えたかについて検討する。この時期には、写真と義捐幻灯会（スライド上映会のようなもの）が新しいメディアとして登場した。また、このようなメディアが、当時の災害観を変容させる媒体のひとつになったことを指摘する。

第Ⅶ章は、江戸時代から明治時代へかけての災害観の変化について言及する。そして本

書の副題にある「災異（人知の及ばない天変地異）から災害の科学へ」移行していくプロセスが明らかにされる。そこでは、「地文学」の学校教育における普及が大きな役割を果たしたことが指摘されている。また、本章では、外国人からみた磐梯山噴火についても触れている。

また、本書の巻末には文献案内が設けられており、なぜ「災害の社会史」という領域を必要と考えるにいたったかについて解説が加えられている。

以上、簡単に本書の内容を紹介したが、著者が行った膨大な量の資料分析には驚かされるものがある。また、単に社会史にとどまらず、理学的研究の成果を取り入れながら磐梯山噴火の歴史が描かれており、災害のリアリティーが非常に伝わってくる内容であった。

災害史といえば、これまで洪水、地震などの現象を通史的に並べることが一般的であった。著者の提唱する「災害の社会史」は、災害後の人々の対応を明らかにした点でオリジナルな研究であり、災害史研究に一石を投じた研究であるといえよう。

文献案内において著者は、「社会史の有効性は災害を対象とすることによってこそ、単なる社会史一般でない現実的な学問の有効性も期待できる」と指摘するように、本書においては、災害の歴史をいかに現在あるいは将来の起こりうる災害のために役立てるかという姿勢が貫かれていることが特徴といえる。

地理学も、少なからず時間軸をもつ歴史科学の側面がある。歴史科学的側面をもつからには、本書で貫かれた現代社会、あるいは将来の社会にいかに関与すべきかについて、常にそのことを考慮しながら研究を進めること

が、社会的要請に応えるためにも必要ではないだろうか。

本書は、災害史研究の有効性を指摘した一冊であり、また、歴史に学ぶことの大切さを考えさせられる一冊でもある。さらに内容的には、地理学にかかわる部分も多く含んでおり、歴史地理学・災害の地理学を専門とする方に、一読されることをお薦めしたい。

また、磐梯山の麓にある北塩原村には、磐梯山噴火博物館がある。本書にかかわる資料の展示ほか、地形や地質、また周辺の自然についても紹介されており、機会があればそちらに行かれることもお薦めしたい。磐梯山噴

火博物館のホームページの URL は、
<http://www.akina.ne.jp/~bandaimu/>。

[付記] なお、本稿脱稿後の2000年8月中旬、本書が取り上げていた磐梯山周辺地域では、頻発する火山性地震により、臨時火山情報が発令された。また、9月には、北海道の駒ヶ岳において小規模な噴火が観測されている。これらは今のところ大きな被害を出してはいない。しかし、将来、噴火が再度発生し、被害が誘発される可能性は十分に考えられる。これから発生する可能性のある火山災害に対して対策をたてるために、過去に発生した火山の被害に人々はどうか対応してきたのかを改めて知り、災害への危機管理を徹底するという面からも本書は重要な示唆を与えてくれるだろう。

(立命館大学・院 河角龍典 記)